

『S・カルマ氏の犯罪』(安部公房)考

吉田 俊彦

はじめに

加賀乙彦が、『湿原』の中で、厳しく摘発した検事調書の精巧な論理構造の虚構性は、種々の人間の狡猾な世知の中にも生きており、善良な人間の平凡な幸福がそれによって脅かされることも稀なことではないだろう。『S・カルマ氏の犯罪』の主人公・ぼくの、名前の喪失という不条理な事態は、こうした日常的論理構造の虚構性とその残酷な横暴性に翻弄される人間の悲惨な生の姿をまざまざと見せてくれる。

名前の喪失という異常事態に陥った主人公・ぼくの不幸な生活の戦いには、当然、作者固有の悲惨な生の原体験が深く関わっているものと考えられる。戯画的手法を用いる際限のない相対化志向によって、既存の文化を突き抜けたある新たな歴史エネルギーを模索する『S・カルマ氏の犯罪』の形象力学には、官権の強化されてゆく戦時下のファシズム体験をはじめとし、敗戦直後の満州および引揚船における反日常的状况との遭遇とか、さらには、被占領下時代の生活基盤の喪失混乱などが複雑に錯綜し作用しているものと見てよからう。

この小論では、こうした不幸な原体験を支えとする鋭利な批評精神と詩的感性に注目しながら、安部文学の思索的原点を尋ねてみた。

一 『スペイン曠野』の形象的意味

扉に、「私の真理を害ふのは常に名前だった」というエピソードを記す『無名詩集』の巻頭作品・『笑ひ』の次の詩句は、安部文学の発期の特徴を採る重要な手掛りとなる。

《じつと噛みしめて

もう二度と笑はなくなった唇が

細々と語る悦びを私は愛した

誰かが代りに笑って呉れるに違ひない

炎え上る草原と凍りついた都会に

消えて行く蒼白の魂を私は愛した》

これは冒頭部第二聯までの詩句であるが、「笑ひ」を捨て、「悦び」を「細々と語る」ことしかできない「蒼白の魂」に心を寄せる「私」は、出発期における安部公房の自画像と見て差支えあるまい。「蒼白の魂」が消えてゆく「炎え上る草原」とか「凍りついた都会」は、安部文学の形象基底に広がる精神風土の象徴に外ならず、ライオン、縞馬、キリン、狼、そして、ラクダのみが眼を細める主人公・ぼくの胸中の「スペインの曠野」は、この詩中の「炎え上る草原」に直結しているものと見ることができよう。名前を喪失した主人公・ぼくは、当然、名刺によって「炎え上る草原」に追放された人間ということになるが、『笑ひ』の後半部の詩句に注意する時、主人公・ぼくの置かれている悲劇的状况が、より具体的に見えてくる。

《歴史から解き放たれた心は

笑ひからも逐放される

眠りも浅く泣かねばならぬ

悦びを欲する幸ひの為に

風に洗はれた廃疾の路傍で

情熱は絶え 憧れは葬られる》

名前を喪失し、スペインの曠野を胸中に広げる主人公・ぼくの悲劇は、「歴史から解き放たれた心」に生きる悲劇に外ならない。磯田光一氏は、「歴史」という詩語を「巨視的にいえば、伝統の累積としての歴史である。しか

しそれは、より狭くいうならば、人間を規定している文化的諸条件といつてもよい」と解釈されながら、この既存の文化的諸条件と訣別しようとする人間の宿命をこの後半部の詩句に読み取っておられるが、名前を喪失し、スベインの曠野を胸中に広げる主人公・ぼくの生は、既存の文化的諸条件から断絶し、しかも、社会的帰属基盤も持つことのできない原初的な孤独状況に置かれた生と言えよう。主人公・ぼくは、「笑ひからも逐放され」「眠りも浅く泣かねばなら」ず、そして、「風に洗はれた廢疾の路傍で」「情熱は絶」やし、「憧れは葬ら」ねばならないのである。このような安息不在の場所に、どのような新たな生の基盤が拓かれると言うのか。ここで、「曠野」の中に「果しなく成長してゆく」作品末尾の「壁」のイメージが連想を呼ぶ「ツァラトストラかく語りき」(ニーチェ)の『沙漠の娘たちの間に』の詩句に注目しておきたい。

ツァラトストラのエピゴネンたる「影」(以下「影」と略記)は、東邦の沙漠の国の明るく乾燥して新鮮な原始の野性に心を寄せながら、次のように歌っている。

『沙漠は生長する。沙漠を蔵する者は災いなるかな！

——おどろくべきかな！ この莊嚴よ！

げに莊嚴なることよ！

これぞ堂々たる発端である！

アフリカにふさわしき莊嚴よ！

こは獅子の威にふさわしく、

道徳を呼号する狼の威にふさわしい——』

『S・カルマ氏の犯罪』末尾の詩的イメージに直結するのは、冒頭部五行の詩句である。「沙漠は生長する」と「沙漠を蔵する者」という二つの詩句は、そのまま、シュールリアリズムの手法による形象語として生きているものであり、「堂々たる発端」は新たな認識志向を支える起点となるものである。理性的文化の拘束力を受けない熱帯の野性的生への共感の広がり重ね合わせながら、果しなく広がる沙漠を「生長する」という詩句によって捉えるニーチェの感性と形象構図は、『S・カルマ氏の犯罪』の「曠野」の広がり

重なり合うものであるが、ニーチェと異なる安部公房の形象特徴は、原初的空間に、ある新たな文化的出発の始動を告げる立体的イメージを核にしていることである。

『かの女らの許には、ここにあると同じき明るき東邦の大気があった。かしこにいたとき、われは曇り湿つても憂く老いたるヨーロッパから、もつとも遙かに離れていた！

そのときは、われはかかる東邦の娘ら、また異国の青い穹窿を愛していた。まことに、そこには一抹の雲も思想も懸つてはいなかった。』(傍点引用者)

これは、「影」の歌う詞章の直前にある語りの一節であるが、「沙漠の娘たち」の明るく健康的な野生美と「穹窿」の青く広大な透明美を、「そこには一抹の雲も思想も懸つてはいなかった」と「影」に語らせるとともに、「曇り湿つても憂く老いたるヨーロッパから、もつとも遙かに離れて」いる地点を「影」に確認させているニーチェが、やがて、詞章の中で、「生長する」「沙漠」の強烈な原始的生命力を「影」に詠嘆させる時、この讃辞の背後には、当然、ヨーロッパの合理的、理性的文化の病弊を裁く批評精神が鋭利に働いていたと見てよからう。「これぞ堂々たる発端である」という詩句は、自由奔放な「沙漠」の原始的生命力に、潤達勇壮な人間の歴史の始源を感知する讃辞であり、「老いたるヨーロッパ」文化の中には見出し得ない、新たな歴史の出発点を指し示すものと解することができる。

S・カルマの名前を喪失した主人公・ぼくを、グリーン服の男に四六時中監視される「永遠の被告者」に仕立て、そして、既存の文化的諸条件から疎外し、さらに、スペイン原野の広がる胸中に「壁」を「果しなく成長」させ、結局は、全身を「一枚の壁そのものに変形」させてしまう安部公房は、その巨大化してゆく「壁」を前にして、ニーチェの描く『沙漠の娘たちの間に』の「影」と同様に、過去の文化的遺産からは訣別し、「堂々たる発端」を見定めていたと言えるのではなからうか。ここで、主人公・ぼくの恋人であるY子の変容過程を整理しながら、安部公房の認識志向の特徴に注目してみたい。

二 名前の喪失と存立基盤の崩壊

《主任と将基をさし終つてから、カルマさんはタバコをふかし、十分ばかり私と話をしました。》「その話の内容は？」「映画の話です」(略)「話おわつてからカルマさんは午前中の仕事の残りを口述し、私がそれをタイプしました。三時になると組合の大会がありましたので、私もカルマさんも出席しました。その大会の間じゅうカルマさんは私の隣に掛けていました」

(傍点引用者)

これは、主人公・ぼくのアリバイ証言をするY子の言葉であるが、この証言内容から浮び出てくる主人公・ぼくの特徴は、職務に忠実勤勉で、周囲と協調融和してゆく社交性を備え、そして、趣味も持ち、精神的余裕のある明朗健康な人物ということになる。つまり、既存の価値基準を大事にしている調和的な人物である。こうした主人公・ぼくの自然の日常生活感情の中で、共同的業務を行ったり、組合大会の会場で終始隣席を占めるY子が、次第に恋人的位置を占めていったとしても何ら不思議なことではない。証言台に立つY子が、証人の証言を根拠もなしに否定する裁判官の言とか不合理な論法で問題整理を行う裁判官の姿勢などに敵しい批判の言葉を返す時、主人公・ぼくは、Y子の「雄々しい勇氣」に「たのもしさ」と「感動」を覚えていたが、この時点における主人公・ぼくの特徴は、日常的な価値基準と生活秩序に支えられた合理的で健康な人物と言える。やがて、Y子が不合理な裁判に立腹し退場しようとする時、主人公・ぼくの思い悩む次の内面描写は重要である。

《「どうなさったの、カルマさん？ 行きましようよ」平然と、何事もなげに言うY子に、何と答えたものでしょう。Y子を愛しはじめていたぼくの心は、ぼくがこの法廷を無視し去るほど潔白ではないと告げることで、折角のY子の信頼を裏切る勇氣はともありませんでした。しかもそのとき、事務所まで名刺に言われた言葉、ぼくらの関係を見破るかもしれないぼくの私生活に関心を持っている俗物、それがY子のことであったことにふと思ひ当るのです。悔恨と疚しさで、ぼくはあやまるように言いました。「目覆をされているんで、うまうまいかないんだよ」(傍点安部公房)

ここで、まず注意しなければならないことは、Y子を「愛しはじめてい

る主人公・ぼくに、「俗物」者たるY子を意識させていることである。この意識化される彼女の「俗物」性は、この日、アパートの前で彼女と別れる主人公・ぼくの胸中に起こる彼女への抑えがたい愛の衝迫などから推して、主人公・ぼくの生活意識にそれほど悪影響を及ぼしているとは言えないが、やがて、主人公・ぼくが不条理な日常世界からの疎外者的位置を明確にしてゆくに従い、これは重い意味を持ちはじめてくるのである。

第二には、職場の同僚に警戒の目を配る名刺が、「俗物」という人間の価値判断を同僚に対して下していることに注意しなければならない。「個人的に君に関心をもっている俗物どもに見られたりしたら」と主人公・ぼくに忠告する際の名刺は、「俗物」を見下すだけの精神の高みに立っていると見なければならぬ。「俗物」を無学無風流で心さまの卑しい人間と定義するならば、名刺は、教養もあり、風流も解し、理知的で優雅な美質を備えた人物の形式と言えよう。つまり、主人公・ぼくの特徴として、すでに見てきた美質の外に、理知的で鋭利な自意識を働かせる「反俗物」的感性を挙げることが出来る。この特徴は、次のような内面描写部に生々と具象化されている。

《Y子の後姿を見送るまいとすることは、たいへんな努力のいることでした。ラクダの檻の前での三倍もの激しさで、胸の空虚感ほくを責めたたてました。しかし良心は断乎として拒みます。あんな曠野にY子ひとりどうやって暮せるでしょう。》(傍点引用者)

自己の胸中を突き上げる衝迫の激しさを計測し、それに見合う抑制力を加え、さらに、己れの胸中に広がる「スベイン曠野」にも、注意深い分析を加えているのである。

ところで、意志疎通も十分に叶い、深い愛情をもって運命を懸念することのできたY子の存在が、不思議な敵対者としての特徴を明確に見せはじめるのは、アパートにおいて、名刺の仕組む闘争異変に巻き込まれ、「理性が役立たなくなり」「自由がなくな」り、そして、「必然と偶然のけじめがまるでなくな」る混乱に陥つてから後のことである。

《人間たちは私たちのことを墮落したとか異常だとかいうかもしれないわ》ぼくはびっくりしてしまいました。こともあろうにY子が人間たちは

などとまるで自分は人間でないようなことを言い、一体どうしたというの
でしょう？名刺に誘惑されて、Y子までぼくの敵になってしまったのぜし
ょうか？(略) 恐怖に似た悲しさが、ぼくの心臓のまわりに薄い水の膜を
はりました。(「人間たち」以外の傍点引用者)

ここで、主人公・ぼくの聞き咎める「人間たちはなどまるで自分は人間
ではないようなことを言」うY子の言葉は、重い意味を持っていると言わな
ければならない。この言葉によって、主人公・ぼくは、Y子が名刺と同類の
「敵」に転じたと考えなければならなくなるからである。名刺の象徴的意味
は、名前を喪失したまま勤務先の事務所に出勤する主人公・ぼくに、「一体
君はここに何しにやってきたんだ。最初からここはぼくの領分だ。君なんか
の出しゃばる場所じゃない」(傍点引用者)という非難を浴びせる名刺の言
葉から推して、自己の内発的な自然の衝迫力を抑止し、日常的な既存の価値
基準と秩序体系に従って生きる生の側面の象徴ということになるが、Y子が
この名刺と同類の「敵」となる時、主人公・ぼくは、孤立無援の状況に立た
されることになるのである。

日常的世界との接点と科学的な合理性と法治的秩序と、そして、人倫的基
盤を喪失した主人公・ぼくが、自己の閉塞的な内部世界において、Y子固有
の魅力的生命体とは無縁に独断的美化を重ねる限り、あるいは、すでに見
てきた「俗物」的特徴を備えたY子が、日常的な既存の価値基準と秩序体
系の象徴・名刺と密着して生活する限り、Y子は名刺と同様の形骸化作用を
避けることはできないのであり、主人公・ぼくがY子に疑惑を抱く時点以降
のY子の変貌相には、この二つの形骸化作用が二重投影していると言えるの
ではなからうか。

①「Y子はどこにいる？君知っているだろう」ずばりと切込むと、「あら、
私……Y子よ」「いや、君じゃない。さっきまで君の左半分だった、もう
一人のY子……」ふと彼を正視したマネキンのY子の表情が妙にこわばり
ました。／「変なことをお尋ねになるのね。何故そんなこと……？」「何
故って、Y子はぼくの恋人なんだよ。愛することができたにちがいない唯
③一の人だ。最後にひと目あっておきたい」／「本当かしら。もしそれが本

当なら、私にも答えなくていいはずだわ」「何故？」「あら、今度はあな
たが何故っていうのね。お分りにならないければいいの」／「マネキンのY子
はひどくがっかりした様子で俯向きました。その落胆は大きく、顔がその
まま胴からおちそうになりました。思わずその顔の下に手を差しのべ
ますと、その手の中でマネキンのY子は本物のY子に変わっているのです。
⑧／「ああ、君、Y子……Y子ちゃんだとは知らなかった。ぼく少しどうか
していたんだよ」うれしくなって抱きよせようとすると、Y子はつつと離
れ、肩で大きく息を吸込み、悲しげに見開いた大きな眼で彼をじっと見詰
めながらゆっくり首を左右に振りはじめました。(傍点引用者)

ここには、不条理な日常世界の構造力学に支配された愛の幻想性が見事に
視覚化され、不思議な余情を持つイメージに定着化されている。傍線部(1)に
おいて、「Y子はどこにいる？」とマネキンのY子に尋ねる主人公・ぼくは、
Y子の魅力を、日常的合理性に支えられたY子の存在意味の総体から眼を逸
らし、彼自身の閉塞的な内部世界で定型化した独断的幻想の中に捉えている
と見てよからう。日常的な既存の価値基準と秩序体系をも大事にしなが
ら、自己の存在性を定型化しているY子にとっては、その定型化した存在形式を
見ようとしぬい主人公・ぼくの偏向性は、理解しがたいものであったはずで
ある。傍線部(2)において、「表情」を「妙にこわば」らせ、「変なことをお尋
ねになるのね、何故そんなこと……？」という質問を返すマネキンのY子の
不満には、主人公・ぼくの尋ね人その人である自分に、尋ね人としての存在
性を認めようとしぬいことへの真面目な抗議の意を読み取ることができ
る。この抗議の意は、傍線部(3)において、「最後にひと目あっておきたい」と述
べる主人公・ぼくに言葉を返す傍線部(4)の「もしそれが本当なら、私にも
答えなくていいはずだわ」という答えの中にも、そのまま見出すことができ
る。この再度の抗議にもかかわらず、主人公・ぼくが尋ね人その人の姿を自
分の中に認め得ないでいる状態を前に、傍線部(5)のマネキンのY子が「ひど
く、がっかりした様子」を見せるのは必然の成り行きである。

自己の存在性を主人公・ぼくに容認されないことから起る大きな「落胆」
のため、「顔がそのまま胴からおちそうにな」っている傍線部(6)のY子

の動搖は、既存の日常的な価値基準と秩序体系を忘れ、Y子自身の内部より起る自然的衝迫に身を任せている姿に外ならない。胸から落ちそうな顔を受けとめる傍線部(7)の主人公・ぼくの手の中で、「マネキンのY子」が、「本物のY子」に変貌してゆくのは、既存の日常的な価値基準と秩序体系を支えとする内的生命体の形骸化が崩れ、Y子の裸形の姿が見えるためと言えよう。

しかし、傍線部(8)において、主人公・ぼくがその裸形の姿を「Y子ちゃんだとは知らなかった」「少しどうかしていたんだ」という弁明によって「抱きよせようとする」時、主人公・ぼくは、傍線部(9)のY子の裸形の内的生命体によって拒否されなければならないのである。

主人公・ぼくは、名前の喪失という異常な事態によって、既存の日常的な価値基準と秩序体系のみならず、自己の内的生命体の存在性までも、その確認を不可能にしたと言わなければならない。タイピストのY子とマネキンのY子が半々に合わさるY子の分裂像は、そのまま、主人公・ぼくの内的分裂の象徴とも言えるのであり、また、Y子を悲嘆に陥れる主人公・ぼくの認識の無力は、内的生命体とその形式との分裂状態の招く悲劇に外ならない。ここで、この分裂的悲劇を齎す不条理な日常世界の構造力学に注目してみたい。

三 不条理な日常構造と自我の解体

《今日にあっては、小人が支配者である。かれらはすべて忍従と・謙抑と・さかしらと・勤勉と・他人への顧慮と、——さらにかかる小さき徳の云々とを説教する。》

(略)

かれらは問い問うて倦むことがない、——「人間はいかにしてもっともよく、もっとも快適に保存せらるるか？」と。かれらは之によって、今日の支配者となったのである。

かかる今日の支配者を——かかる小人を克服せよ。おおわが同胞よ、かれらこそは超人にとつての最大の危険である！》(傍点引用者)

これはニーチェの『ツァラトストラかく語りき』の中の『高人』の一節で

ある。「超人」の前哨たるべき「高人」の完全性の中には、「超人」的生の属性を見定めることができるが、名前を喪失した主人公・ぼくは、それを契機とし、自己固有の内発的衝迫を抛り所に、「超人」的生を歩むことも可能であったはずである。胸中に広がる「スペイン曠野」に、「小人」の支配者を吸引埋葬し、忍従も、謙抑も、さかしらも、勤勉も、他者への顧慮も笑殺し去る道である。しかし、安部公房は、主人公・ぼくにその道を注意深く回避させている。高野斗志美氏がすでに着目されているように、主人公・ぼくは「名前を否定したのではなく、それに逃亡されたにすぎない」のである。物語展開の発端部において、名前の喪失という異常事態に置かれた主人公・ぼくは、すでに見てきたように、不条理な日常的拘束力の支配下に喘ぎながらも、日常的「勇氣」と「たのもしさ」を持つY子の愛の獲得に苦慮する「小人」的生を歩むのである。ここで、このように「小人」的人物に設定された主人公・ぼくと不条理な日常的世界構造との力学関係の問題が、最も鮮明な形で表われている洞窟裁判の場面に着目してみたい。

《ドクトルは渋々立ち上り、「私にかかる非科学的な問題に関して何も発言したくありません」「如何なる理由によって発言を拒むのか?」「主義です」(略)金魚の目玉の唇がとがりはじめました。「如何なる主義も事実が事実であることを否定できないと思います。このさい、科学主義者の安易な二元論で真実をゆがめないでいただきたい」/「だが」と哲学者の一人が言いました。「そもそも認識論的にいえば……」と右手を左の鼻の穴につっこみ、全身ふるわせて鼻毛を抜き、ズボンの膝でさっと拭いて、「事実などというものは無い」/「しかし」ともう一人の哲学者が言いました。「弁証法的にいえば」目を閉じ、夢見るように、「公理の仮設によって事実が可能である」/「公理、公理、公理万歳!」突然数学者が手を打ってはしゃぎました(略)》(傍点引用者)

これは、主人公・ぼくの犯罪を裁判する審議過程の一場面であるが、ここには、重要な三つの問題を整理することができる。第一は、認識的特徴の差異によって特徴づけられた対立意見の設定意味である。客観的、合理的実証精神を尊重する科学者・ドクトル、経験的事実を重んじる日常的生活人の

金魚の目玉、事実などというものを容認しない観念主義の哲学者、公理の仮説によって弁証法的に事実を捉えようとする観念的弁証法主義の哲学者、そして、絶対的原理を渴望する根源的理想主義の数学者と鮮明な特徴づけを果しながら、対立的な意見を交錯させているが、この対立場面の設定には、「小人」的主人公・ぼくの社会的存在基盤を揺がす、不合理で滑稽で無気味な日常的世界の構造力学を明確に捉えることができる。この場面設定の中で、主人公・ぼくの理念的存在基盤は崩壊したと言わなければならない。

第二は、戯画的手法の批評原理である。戯画的手法を支えるものは、笑いの批評精神であるが、梅原猛氏は、ベルグソンの「機械的なこわばり」理論を排し、「価値低下のトリック」に着目されながら、滑稽は「人が一人の人間の注意深いしなやかさと、生き生きとした屈伸性を見出そうとするところに機械的なこわばりがある」からではなく、「価値あるものが、突然に価値のない姿をさらし、価値あるものと価値ないもののコントラストが生じ、その結果価値低下が生じるから」生れると論じておられる。このコントラストは、哲学者の知的水準の高い認識志向を表わす「認識論的に言えば」という言葉と、知的に未熟な幼児的仕ぐさを感じさせる鼻の穴に入れた指のよごれを「ズボンの膝で「拭く」という行為との間に容易に見出すことができるのである。この滑稽化の手法は、主要な認識場面ではすべて見出すことができる。

第三は、戯画的手法に働く安部公房の形象モチーフの問題である。これは、「はじめに」の中で見てきたように、ファシズムの強権、敗戦による価値観の転倒混迷、被占領下の反日常的な残酷さなどの体験による「絶対」なるものへの不信とか反逆精神にその根を認めることができよう。ドストエフスキ、ニーチェ、ハイデッガー、カフカなどの書を読み漁った読書歴は、それの一つの思想的整理を与えたものと考えられる。

次いで、法学者の意見内容にも注目しなければならない。

《略》つまり、被告は名前を紛失して現在名前を持たないのであるから、名前のないものに法を適用するわけにはいかぬ。結論として、われわれは被告を裁くことは出来ないものと思われる」／《略》ぼくは思わずぼつと

していました。／ところがその喜びも、第一の法学者の次の発言であっけなく消えてしまい、リトマス試験紙のように忽ち反対側の色に変色してしまつたのです。／「しかし、それでこの裁判が終つたわけではない。なぜなら、法はたしかに被告を裁くことができぬが、同時に被告は法に対して自己の権利を主張することもできぬ。法と権利は名前に対してのみ関係するものである。よって現状維持のほかはなく、裁判は続行される。(略)》(傍点引用者)

ここに見られる二人の法学者は、対極的な反対結論を出しながら、その結審理由は全く同一のものとなっている。「法と権利」は「名前に対してのみ関係するもの」であるという、法的処理の合理的論拠の一面を言葉の限定性範囲で絶対化し、それに飛躍した恣意的解釈を付加してゆく法学者のこの結論によって、名前を喪失した主人公・ぼくは、社会的存立基盤を危機にさらされ、当然の成行きとして、他者との正常な社会的関係を成立させることも、また、自己の人権を保持してゆくことも不可能になってくるのである。

法学者の審理態度が主人公・ぼくの人間としての社会的存立基盤を剝奪するものであるとするならば、父親の助言態度は主人公・ぼくの精神的存立基盤を喪失させるものであり、そして、ドクトル、哲学者、数学者の審議態度は主人公・ぼくの理念的存立基盤を崩壊させるものである。さらに、アパートの夜の異変は、日常的な生活秩序を保障する定型化された記号体系を消滅させるものであり、主人公・ぼくの合理的な論理基盤を解体させるものである。

このようにして、名前の喪失という異常事態を通し、主人公・ぼくのあらゆる存立基盤を崩壊させた安部公房は、人間自身の持つ不可思議な日常的意識構造と様々な人間の生きる不条理な日常的世界構造との複雑な力学関係を鋭く凝視しながら、「動いている社会の力学」の中に新たな生の探索方向を見定めていたと言えるのではなからうか。

四 「曠野」に聳え立つ「壁」の象徴的意味

主人公・ぼくを「小人」的人物に設定し、そして、名前の喪失という異常事態に置いた安部公房は、主人公・ぼくの悲劇的な生の本質を捉えるために、作品

に統一軸を与える一つの行動的劇要素とそれを支える状況的定着要素を用意していると言えよう。行動的劇要素は、不可思議な日常的意識構造を持つ男と女の愛の力学を主軸に据えている。タイプビストのY子を中心にしたほくと名刺、マネキンのY子を中心にしたほくと名刺、ほくを中心にしたタイプビストのY子とマネキンのY子、マネキンのY子を中心にした男のマネキンとほく……、こうした愛の角逐が、シュールリアリズムの奇抜な飛躍的手法によって微妙に重なり合いながら連続してゆくのである。状況的定着要素は、平凡な生活人の生活意識を混迷に陥れる不条理な日常の世界構造の設定である。ドクトルの合理精神と哲学者の世界観と法学者の法理論と父親の肉親的情理は、それぞれ両義性を発揮しながら、主人公・ほくの生理的、理念的、社会的、心情的存立基盤を解体消滅させてゆくものとなっているが、この状況設定によって検証されてゆく主人公・ほくの悲劇的生の本質は、次の三点に整理することができる。

第一は、名前の喪失という事態に立ち至った人間は自己の内部に拡大化してゆく虚無の「曠野」を、不可避なものとして受けとめなければならないことである。第二は、その不条理な事態の解決を自立的な方法によって果せようとする時、合理的な思考判断と自立的な存在基盤への信頼を失い、分裂的状况を招くということである。そして第三は、その不条理な事態を他力的な方法によって処理しようとする時、日常的世界の不条理な構造性が際限もなく拡大化してゆく、自己の存立基盤の解体消滅を招くということである。

《(略) 論告によれば、歴史に記載されたすべての事件犯罪、ならびに現在行われているすべての裁判があなたに関係し、あなたの責任であるというのです。なぜなら、そのどれにもあなたの名前が記載されていない。」「そんな無茶な!」(略)「(略) あなたが名前を取戻せば、まず死刑はまぬかれぬ。」(略)「(略) あなたは動物園での裁判が終わったとき、委員たちが最後に言った言葉を憶えていますか?」「ええ、法廷はほくの行くところ。どこまでもついでとてくると言いました。」「イエス、しかして。あなたは大なることを忘れましたね。その言葉にはもう一つ、重要な条件がついていました。それは『世界中、どこまでも……。』。(略) 世界の果に行つてしまえばいいのです。』(傍点引用者)

これは、主人公・ほくとG町の裏通りに立つ男のマネキン人形との対話であるが、この時点における主人公・ほくは、自己の存立基盤——生理的、心情的、理念的、社会的依拠基盤のすべてを見失っているものであり、マネキン人形は、こうした主人公・ほくの日常的位置を正確に見定めながら、永遠の被告者としての自己認識と世界の果への旅立ちを指示しているのである。この指示を正確に果し得るマネキン人形の特徴は、不条理な日常的世界の構造そのものの定型化された形として、自己固有の内的生命体の働きを一切持つことなく、受動的に町の裏通りに立つ「人形」の特性によって保証されているのであるが、このマネキン人形の指示に耳を傾け、それを抛り所に新たな生の方角を歩きはじめる主人公・ほくの人間の変質は、名前を喪失し、合理的な思考判断と自立的な存在基盤との崩壊危機にさらされる不定型なほくとという定型化が進行し、マネキン人形の完全なる定型化秩序に組み込まれはじめて生じたものに外ならない。もっとも、不条理な日常的世界の秩序体系に絶対的な安定性のあるはずもなく、マネキン人形の助言を支えとする主人公・ほくの新たな生の存立基盤も、常に転変の危機にさらされなければならない。ことは言うまでもない。

ところで、「世界の果」についての具体的な説明を行う「せむし」は、自己の不可思議な日常意識構造と不条理な日常的世界構造との力学関係によって挾殺され、日常秩序体系から疎外されて生きなければならなくなった人間の象徴と言つてよからう。

《(略) 地球がまるくなつたので、(略) みなさん自身の部屋が世界の果で、壁はそれを限定する地平線にはかならぬ。(略) よろしく壁を凝視しながら、おのれの部屋に出發すべきなのであります。/(略) /「ここでひとつ注意していただかねばならないことがあるのです。それは、地球が球体であるということによって世界の果に附加えられた今ひとつの重要な性質についてであります。すなわち、両極という概念……(略) 世界の果も自然二つのボールの弁証法的統一と考えざるをえなくなる。これを具体的に申しますと、つまり、みなさんの部屋もそれに対立する極としての世界の果を發見することによって、はじめて真の世界の果たりうるとい

わけなのであります。(略)世界の果に旅立つものは、単にこの世界から脱出するものであるのみならず、同時に、この二つのボールを結びつけるといふ重大な使命を帯びた使者である……あるいは、自己をメッセージとして自己に贈りとどける使者である!」(傍線引用者)

自己固有の内的生命体の働きを一切持つことなく、日常的秩序体系そのものとなっている人間の象徴であるマネキン人形の助言と、日常的秩序体系から疎外され、世界の果に逃亡しなければならなくなった人間の象徴である「せむし」の説明とによって決定づけられる主人公・ぼくの生の特徴は、この「せむし」の弁説の中で戯画化された弁証法的生の論理の中に見出すことができる。日常生活者の論理と疎外者の論理との融合調和を図るこの戯画的弁証法を、具体的な形象要素との対応関係の中で正確に解釈してゆく時、「曠野」に聳え立つ「壁」の象徴的意味は、自ら明確なものになってくる。

まず第一の問題点は、傍線部(2)の「みなさん自身の部屋が世界の果」であり、「壁はそれを限定する地平線」であるという考えである。傍線部(1)の「地球がまるくなった」という世界認識の変化を前提とするこの論理の展開には、各所の議論における論理展開と同質の滑稽な飛躍が認められるが、この逆説的な位置設定にこめられている意味を見逃してはならない。つまり、この位置設定によって、主人公・ぼくは安易な現実逃避が許されないのである。次いで第二の問題は、傍線部(3)の「みなさんの部屋もそれに対立する極としての世界の果を発見することによって、はじめて真の世界たりうる」という考えである。次の「壁」は、この「真の世界」を具体的なイメージ形象によって捉えようとしたものと見てよからう。

《壁は慰めのように限らない広さで彼の前に立っていました。(略)／(略)／ふと壁が見えなくなりました。物質からメタフィジカルなものに消えて行ったのでした。彼はまたたきを繰り返してに還元を求めました。壁は帰ってきました。(略)壁はもはや慰めなどではなく、耐えがたい重圧でした。》(傍点引用者)

「対立する極」が「慰め」の壁と「耐えがたい重圧」の壁、あるいは、「フィジカルな壁」と「メタフィジカルな壁」にイメージ化されていることは言うまでも

ないが、主人公・彼がこの二つの表情を持つ「壁」を凝視しつづける時、「真の」「世界の果」が開けはじめるのである。つまり、平穏な日常生活場所の壁のみを見定めるところに、真の世界の果が開かれることはないのである。

最後に第三の問題は、傍線部(4)の「自己をメッセージとして」「自己に贈りとどける使者」についての意味である。これは、次の「壁」のイメージを対応させることによって、容易に理解することができる。

《それでも彼は壁から目をそらすことができないのでした。(略)ついには眼の中に地平線が芽生えるように、いつか壁は彼の中に吸収されはじめていたのでした。「おまえの中で、もう何ものからも呼ばれないただの石になって、よみがえろう」素晴らしいながら壁は次第に透明になって消えて行きました。》(傍点引用者)

主人公・彼が「目をそらすことができない」壁は、自分の部屋の「慰め」の壁の対極に位置する、先住者の生活を吸収した「重圧」の壁であるが、この不条理な「他者」との関わりが生じる対極的「壁」を発見し、それを凝視しつづける主人公・彼が、「二つのボールを結びつけるといふ重大な使命」を「自己をメッセージとして自己に贈りとどける」ものとするためには、「眼の中に地平線が芽生えるように」壁が「彼の中に吸収され」なければならぬのであり、さらに、二極の壁が主人公・彼の「中」で、「もう何ものからも呼ばれないただの石」にならなければならないのである。

凝視する壁の「透明」化作業の具体的内容は、現実世界の具体的な諸問題との対決姿勢の中に検証してゆかなければならないものであるが、この「透明」化作業を経て獲得される胸中の「何ものからも呼ばれないただの石」という暗喩の放つ感性的響きから推して、その「透明」化作業は、既存の秩序体系の記号では説明しつくすことのできない、主人公固有の自由な生の存在様態でなければならぬ。凝視する壁を「透明」化し、この「ただの石」が胸中に結晶する時、主人公・彼は、「歴史から解放された心」の自由を満喫することができるのだと言えましよう。

「壁」の凝視の果に立つ砂丘の彼方の「曠野の中」に聳え立つ「壁」とその背後の「小さな酒場」、「タイピストY子」と「マネキン人形のY子」との分裂と融合

パパとユルバン教授との分裂と融合……、これらはすべて対極的「二つのポール」であり、主人公・彼にとつては、凝視し、透明化し、そして、「ただの石」へと転化させゆかなければならない不条理な日常構造の象徴に外ならない。

むすび

《見渡すかぎりの曠野です。

その中でほくは静かに果しく成長してゆく壁なのです。》

この「曠野」の「壁」の成長は、既存の秩序体系の中に生きるドクトルの科学的合理主義とかパパの日常的合理主義の認識能力を超えたものである。これは、日常の調和的な秩序体系と日常の不条理な闇の深淵との対極性と厳しく対峙しながら、際限のない統合的営為の不首尾な地平の彼方に透視する初源の出発の象徴と言えよう。言い換えるならば、「既成^{注5}観念を失い、かつ〈神〉を見失い」「社会の連帯性の外で、公認の原理以外のものを手に入れ」る「犯罪」の中のみ開ける実存的生の象徴に外ならない。「^{注7}あらゆる意味づけと価値づけとを排除したこの世界を肯定し得るまったく新しい方式を発見すること、に賭ける」ニーチェの、「生長する」「沙漠」を前に漏らす嘆声と同じ嘆声が、「曠野」に聳え立つ「壁」を見据える安部公房の口許からも聞えてくるのではなからうか。

〈注〉

- (1) 『詩人としての安部公房』（佐々木基一編〈作家の世界「安部公房」〉一九七八、一一、番町書房、八〇頁）
- (2) 『増補安部公房論』（一九七九、七、花神社、五七頁）
- (3) 『闇のバトス』（一九八三、四、集英社、二五八頁）
- (4) 佐々木基一『東西比較作家論』（一九八三、六、オリジン出版センター、一一〇頁）
- (5) 有村隆広『カフカと安部の小説―「審判」と「壁・S・カルマの犯罪」―』（一九八五、一〇、同学社、『カフカと日本文学』、一一〇頁）
- (6) 注(2)に同じ。
- (7) 竹内芳郎『実存的自由の冒険』（一九六三、四、現代思潮社、一五頁）

昭和六十一年十一月二十九日受理